



Title	唇・顎・口蓋裂乳幼児の上顎骨歯槽部の成長発育に関する研究
Author(s)	和田, 健
Citation	大阪大学, 1972, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/30805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[3]

氏名・(本籍)	和 田 健
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	第 2 6 8 1 号
学位授与の日付	昭 和 4 7 年 1 2 月 2 0 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	唇・顎・口蓋裂乳幼児の上顎骨歯槽部の成長発育に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 宮 崎 正
	(副査) 教 授 西 嶋 庄 次 郎 講 師 作 田 守 講 師 高 田 和 彰

論 文 内 容 の 要 旨

唇一顎一口蓋裂患者の治療では、外科的治療が最も重要視され、その技術も高度に改善されてきているが、なお、顎の二次的変形、不正咬合などを呈する患者があり、形態回復の面ではいまだ多くの問題点を残している。

そこで最近では、これら形成手術後に見られる形態異常を予防し、改善するために顎矯正的治疗、骨移植などが試みられているが、この種の治療が顎の成長発育に効果的であるか否かについては、これを判定する基準もなく、一致した見解も得られていない。

これらの問題点を解決し、適切な治療を行うためには、形態異常が乳幼児期の如何なる時期に、如何なる部位に現れ、どの様な発育様式を呈しているかを把握しておかねばならない。本研究は、乳幼児期における片側性完全唇一顎一口蓋裂患者の上顎骨歯槽部の成長発育の過程を系統的、立体的に追求し、その障害部位を明らかにし、形態異常の治療の指針を得ることを目的としたものである。

被検者は本学口腔外科に来院した片側性完全唇一顎一口蓋裂患者のうち、年令、体重および以下の条件により区分した4段階(Stage)に該当する者87名であった。即ち、Stage 1: 生後6ヵ月を中心とし、口唇形成手術前の症例、Stage 2: 生後6ヵ月時に口蓋形成手術をうけ、ほぼ2才時に至った症例、Stage 3: 生後6ヵ月時に口唇形成手術、2才時に口蓋形成手術をうけ、ほぼ3才時に至った症例、Stage 4: Stage 3の症例で、ほぼ4才時に至った症例。対照群は正常児62名であり、これを年令、体重により被検者群に準じて区分したものを用いた。

計測には著者が考案作製した乳幼児顔面模型を資料として用いた。これは対象児の上顎一顔面の形態を同時印象し、両者の形態を1個の標型上に転写したもので、上顔面頭蓋を基準として歯槽骨部の形態を三次元的に観察分析するための計測基準面を設定したものである。計測点は上顔面点、歯槽計測点とし、左右11点を選定した。これらの基準面、計測点の選定にあたっては、従来より生体計測

法および模型計測法において妥当性が認められているものの中から十分な検討を行い採用した。計測したそれぞれの値について、各Stage間、および同一Stageにおける唇-顎-口蓋裂群と正常対照群間の比較検討を行なった。有意性の検定はt検定により危険率を5%とした。

結果の概要は次の如くである。

1. 正常群では、前歯部の歯槽骨部自体の成長発育は僅かであり、歯槽骨部全体が前下方に向かって大きく成長発育し、増令的にはStage 1-2およびStage 3-4の各時期に著しいことが認められた。
2. 片側性完全唇-顎-口蓋裂群では、Stage 1でlarger segmentの歯槽破裂端部は著明に前方に突出偏位しているが、I点（乳中切歯歯間乳頭部頂点）、III点（乳犬歯と第一乳臼歯間の歯間乳頭部頂点）、Ret.点（後臼歯歯槽点）の深さはほぼ正常群と同様の値を示し、巾ではやや大きい値を示し、特に前歯部で著明な差を認めた。

Stage 2では、I点を先端としたarch状の歯槽弓形態を呈したが、深さの発育増加量は正常群に比較して著しく少なく、特に前歯部で著明な差を認めた。前歯部における左右のalveolar segmentsは破裂部に移動し、破裂巾は著しく減少した値を示した。高さの発育増加量は正常群とほぼ同様であったが、各歯槽計測点の高さはStage 1と同様に正常群より小さい値を示した。

Stage 3では、各歯槽計測点の深さ、巾はStage 2とほぼ同様の値を示したが、高さでは著しい発育増加量を示し、正常群に近似した値を示した。

Stage 4では、各歯槽計測点の深さ、高さは正常群に比較して小さい値を示した。

以上の結果から、唇-顎-口蓋裂患者の形態異常は上顎骨歯槽部全体におよんでいるが、特に前歯部に著しいことが明らかとなった。そして、Stage 1で顎下方発育不全、Stage 2で顎前方発育不全を呈していることを示し、顎下方発育不全はStage 3で正常群に近似し改善される傾向を認めたと、顎前方発育不全はStage 4にまで影響していることを示している。これらのことから、乳幼児期における顎の成長発育助成の為の治療に指針を得た。

論文の審査結果の要旨

本研究は、唇・顎・口蓋裂患者の上顎骨歯槽部の形態を模型計測法により研究したものであるが、従来ほとんど知られていなかった乳幼児期の成長発育について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。